

# 論文審査の結果の要旨

論文提出者：芝 真里

論文題目：多文化社会における家族形成移民としての国際養子縁組に関する研究

——韓国養子の事例分析からみる新しいトランス・ナショナルリティの可能性——

論文審査委員：主査 教授 西原 和久

副査 教授 村田 裕志

副査 教授 南山 浩二

副査 教授 上杉 富之

〔論文の内容の要旨〕

## I. 論文の目的

### 1. 研究の問題意識と背景

本論文は、韓国から欧米に送り出された国際養子たちとその関係者たちの意識と行動に関する申請者の初発の問題関心に基づく研究論文である。申請者はこの研究において、国境を越える人々の移動と交流という「トランス・ナショナルリティ」のあり方に焦点を合わせ、今後のトランスナショナルな社会文化的交流の可能性を論じている。

申請者は、2009年から2016年にわたり国際養子をめぐる諸問題を継続的に検討した。検討の対象となったのは、主に1960年代から2010年代までの、アメリカ、スウェーデン、韓国における韓国国際養子とその関係者である。申請者のこの研究の社会的背景としては、1950年から1953年まで続いた朝鮮戦争で両親を亡くした韓国の戦争孤児たちが国際養子として欧米に送り出されたという世界的な先進事例の存在と、その後も韓国からは継続的に国際養子が送り出されたという歴史が指摘できる。これらは極めて悲劇的な出来事ではあるが、しかし申請者はこの点の把握だけではなく、韓国国際養子の当事者たちがグローバル化の進む現代社会の中で少しずつ変容していく様子を捉えようと試みている。もはや今日、人々がトランスナショナルに移動することは稀ではないゆえに、今後の社会研究は国際的に移動する人々を視野に入れておく必要があること、言い換えれば、このようにトランスナショナルに移動する人々の先例からなにを学び、そしていかに今後の社会のイノベーションを構想していくのかというのが、申請者の本論文全体を貫く問題意識である。

なお、申請者の個人史的背景としては次の点が指摘できる。申請者はアメリカのボストン大学大学院で子どもの教育に関する修士号を取得したのち、ボストンで多文化教育に従事した経験を持つ。その教育の現場で、韓国からの国際養子の問題に申請者は出会い、現在に至る調査研究の背景が形成された。帰国後、申請者は名古屋大学大学院の社会学講座（博士課程）に進学し、主に移民研究の分野で理論研究を含めた社会学的研究を進め、複数の論文を書いて単位取得・満期退学した。その後は、日本学術振興会の特別研究員（PD）として成城大学大学院文学研究科で人類学的視点も交えた研究を継続してきた。本論文は、そうした教育学的背景を持ちながらも、社会学や人類学を学んできた背景の中で得た研究の視点や手法等が活かされて論じられている。

国際養子は現在、移民研究者の一部で国際的に注目され始めているが、実証研究は欧米

でも極めて少ない。まして日本でのこの方面の研究は皆無に近い。このような状況の中で申請者は英語力を駆使して、韓国から欧米へ渡った国際養子当事者たちとその養親たち、そして自助団体や支援団体の構成員といった関係者たちに直接会って、インタビュー調査を行ってきた。その意味で本論文は、当事者の「語り」を中心とした当事者視点からの研究であり、かつ未開拓の分野への挑戦であり、先駆的な研究であると位置づけることができる。

## 2. 研究の視点と方法

本論文は、韓国国際養子が戦争という悲劇の中で生じた不幸な犠牲者という面だけではなく、そうした国際養子本人や関係者が現在、国境を越えたトランスナショナルな活動を展開し、それが今後の国家・国籍・国境のあり方やナショナル・アイデンティティの問題等に新たな地平を切り開く可能性があるという点に着目している。申請者の調査研究の方法は、主にアメリカ・スウェーデン・韓国に在住の研究対象者に対し、あらかじめ質問紙を用意して臨みながらも、臨機応変に対話を積み重ねて「語り」を聞き取るという「半構造化インタビュー」である。それは、外部からの観察者視点ではなく、あくまでも当事者視点に立って国際養子とその関係者の過去の動向、現在の活動、そして未来への展望に関する「語り」を聞き取り、そうした人々の構築してきた社会的な生活世界を探究するためである。また同時に申請者は、インタビュー調査と共に、国際養子たちが関わる様々な会合や韓国国際養子の世界大会などにも積極的に参加して「参与観察」を行って、これまでの文献資料の検討と共に、国際養子問題の多面的理解を押し進めるように努めていると判断できる。

## 3. 研究の経緯

本論文は、これまでに査読付きの学会誌に掲載された複数の論文に基づいている。特に「スウェーデンにおける国際養子の位置と意味」という論文は東海社会学会の学会誌『東海社会学年報』に掲載され、また韓国における国際養子の運動に関する「重国籍と新しいアイデンティティ」という論文は移民政策学会の『移民政策研究』に掲載された。さらに国内外での学会報告に関しては学会賞を3回受賞している（受賞対象は、国際社会科学団体連盟のマニラ大会でのアメリカの事例研究に関する英語報告や、多文化関係学会年次大会での「トランスナショナルな連帯と多文化共生の可能性」に関する報告等である）。このように申請者は、当該研究分野で高く評価されつつ研究を積み重ねてきた。

そうした研究の経緯を具体的に記すと次のようになる。まず申請者はアメリカでの国際養子に対する養育・教育を研究した。それは、主に1960-70年代の養親・養子を巻き込んだカルチャー・キーピング活動（国際養子の母国文化を保持する活動）の検討であった。だが申請者は、少なくとも養子本人は現在この活動に批判的なことを明らかにしている。さらに申請者はその後、調査研究の場所を移して、この母国文化保持活動に代わる新たなアイデンティティ探究活動を示していたスウェーデンの事例へと研究を進め、そこでトランスナショナルな国際養子のネットワーク形成が見られることを明示した。そしてこうし

た検討を踏まえ、申請者はさらに、世界に四散する韓国養子たちが「母国」韓国社会に積極的に関与している活動状況を検討し、そこから申請者のいう「新しいトランス・ナショナルリティ」を論じたのである。

## II. 論文の構成と概要

### 1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

- 序章 問いと先行研究を踏まえた本論文の位置づけ（概要：多文化社会における文化の概念への問いを含む「移民」に関する先行研究を踏まえた「社会のあり方」への問いの設定）
- 第1章 国際養子縁組の背景と問いの焦点としての韓国養子——アメリカの事例へ（概要：アメリカにおける養親と養子からみたカルチャー・キーピングの意味と機能に関する検討）
- 第2章 受入国からみた韓国養子をめぐるダブルバインドの問題——スウェーデンの事例から（概要：外見は移民、内面はスウェーデン人という国際養子たちの生活世界の記述）
- 第3章 送出国・韓国からみた韓国養子をめぐる〈文化〉とアイデンティティの問題（概要：韓国の重国籍認容とトランスナショナルなアイデンティティの生成に関する論述）
- 第4章 トランス・ナショナルな動き——韓国養子の新たな〈文化〉アイデンティティの創出と多様な〈越境〉連帯（概要：養子たちによる韓国社会への働きかけなど、養子たちの自助団体による越境する連帯に関する論述）
- 第5章 韓国養子たちと韓国社会をつなぐ存在——橋を架ける〈媒介者〉たちに関する補説（概要：韓国養子のパートナーや社会的マイノリティの人々の語りと二世世代養子のコミュニティへの関与の諸相の検討）
- 終章 本論文の結論と課題——トランス・ナショナルに生きる人々とソーシャル・イノベーションの地平（概要：本論文の結論とソーシャル・イノベーションに向けた課題の提示）

### 2. 各章の内容

各章の論述内容の流れは以下の通りである。

序章では、本論文の一つのキーワードである「トランス・ナショナルリティ」概念が示され、それが「国境を越える活動」であると同時に、そうした活動に研究として着目する方法論的視点である点が示された。

第1章では、まず国際養子縁組に関するこれまでの先行研究が検討され、さらに国際養子の歴史も示された。次いで、国際養子取次団体 Holt International 関係者への複数回のヒアリングから、アメリカのカルチャー・キーピングと呼ばれる母国文化保持活動の活動内容と、それが抱える問題点が指摘されている。すなわちここでは、養親たちからは国際

養子縁組の場でいかに〈文化〉が重要だと見なされているのかについて述べられると同時に、養子たち自身の当事者視点からは、それが外から押し付けられる〈文化〉の強制や固定化として捉えられて、〈文化〉それ自体への問いも提起された点が論じられた。

第2章では、スウェーデンの Adoptionscentrum という韓国養子の自助団体が取り上げられ、「静かなる移民」と呼ばれる国際養子たち自身がカルチャー・キーピングを越えて「母国を知る活動」を行うなど、養子たちに受入国や母国の期待に応えるようなアイデンティティの形成とは異なる新たなアイデンティティ形成への志向の萌芽がみられると論じられた。

第3章では、韓国養子たちとその受入国・送出国の人々との間に起きている摩擦——国籍とアイデンティティを中心とする諸問題——が論じられた。その際の焦点は、これまで韓国から世界各地へ送り出された国際養子の「重国籍」取得とアイデンティティの問題である。この問題の議論においては、2011年からの韓国の重国籍制度により韓国養子たちが法的には韓国の国民となりうるように変化したが、それはあくまでも「国益に寄与する外国からの民」という位置づけに留まる点が指摘され、さらに韓国養子による「二重国籍」という選択は2つの国への帰属というよりもむしろ、どちらか一方に完全に所属することの居心地の悪さを示していた点が明らかにされた。そこから調査対象となった韓国養子たちにとっては、アイデンティティ探究が重国籍取得のような複数のアイデンティティを持つことではなく、それとは異なるトランス・ナショナルなアイデンティティに志向しつつあることが知見として示された。

第4章とその補説である第5章では、韓国養子たちの今後の方向性について、グローバル・ナショナル・ローカルの各レベルで探求がなされ、周りからは両国間の「架け橋」としての活動を期待されている韓国養子たちが、自らの位置づけを改めて探るべく、この30年ほどの間に世界各地に自助団体を立ち上げ、さらにはそれらを越境的なネットワーク組織へと発展させてきた様相が論じられた。その際の申請者の着目は、韓国養子がグローバルな志向性を示すと共に、ローカル社会——母国である韓国社会——との関係構築や社会変容に向けた働きかけを強化してきた点にある。ただし、そのトランス・ナショナルな働きかけが必ずしも韓国社会に受け入れられてはいないこと、だがそれにもかかわらず、今度は国際養子と韓国社会とを架橋するさらなる〈媒介者〉的な人々——未婚の母などの様々な社会的マイノリティの人々——もまた存在していることが指摘されている。

終章は、本論文の結論と課題の提示である。その中では特に韓国養子たちの動きを通して得られた知見から、抽象の度合いを上げて一般化できる位相として、今後の方向性と可能性を示す新たな「トランス・ナショナリティ」の視点が検討されている。この検討の狙いは、国際養子当事者の志向性においては、特定の国民文化やアイデンティティに拘らないという脱国民文化と脱アイデンティティの方向性を示すものとして「トランス・ナショナリティ」の生成がみられたという点にある。そしてこの点を最終考察の核としつつ、これまでの諸知見も踏まえて、本論文では、固定的な文化やアイデンティティを超えるような、これからのグローバル社会の担い手となりうる人間存在の方向性と可能性とが示された、と結論づけられている。

### 〔論文審査の結果の要旨〕

本論文の特色は少なくとも2点ある。まず第1点目の特色は、本論文が実証研究の極めて少ない国際養子に関する当事者視点からの質的調査に基づく先駆的な実証研究だという点にある。そして第2点目の特色は、本論文が国際養子の視座から近代国民国家を超える今後のトランスナショナルな方向性を論じた点にある。

特に後者に関しては、これまでの移民研究を含む社会研究が、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックが言うように従来の「方法論的ナショナリズム」の視点から国家内の社会のみに焦点を当てて「ナショナルな枠」の中で論じられがちであったのに対して、本論文は方法論として「トランス・ナショナルリティ」に着目し、そこから研究対象者である国際養子たちには国家・国境・国籍を超える新たな志向性が芽生えてきていることを指摘した点が、大きな特色となっている（出典はU.ベック『ナショナリズムの超克』NTT出版）。

おそらくこの指摘は、アメリカ社会学会の元会長エリック・オーリン・ライトが「リアル・ユートピア」と述べた論点、すなわち今は十全な形ではリアルに存在していないが部分的にはリアルに存在し始めているユートピア的志向性——「公正で人間的な世界を実現するために、現在支配的である諸制度の代替案つまりオルタナティブを考える」こと——を見出す研究と重なっている（出典はE.O.ライト「グローバル社会学のためのリアル・ユートピア」『国際社会学の射程』東信堂、所収）。こうしたリアル・ユートピア的志向性が韓国国際養子の語りと活動に見え始めているという点の指摘が、本論文の大きな特色となっている。

上で述べてきたような本論文の特色は、同時にまた本論文の独創性でもあり、かつ学会・社会に対する貢献ともなりうると考えられる。より具体的には、本論文は、国際養子研究の先端的な実証研究として内外の学術研究への貢献が大いに期待でき、またそれを単なる実証研究に留めずに未来社会へのオルタナティブの可能性として論じる点で、現実社会への提言として読むことも可能である。そしてそれが、本論文の持つ非常に独創的な点である。それは一種の「社会イノベーション」への提言でもある。要するに本論文は、人の国際移動と移動先の社会での定住過程を中心としてきた従来の移民研究に一石を投じるだけでなく、社会科学における「社会」概念をも一新する独創性を持つ。すなわち、社会は国家の中にあるというヘーゲル哲学流の「家族・市民社会・国家」における「ナショナルな社会」という枠を超えるような、「トランスナショナルな社会」の生成を関係当事者視点から具体的に論じた点で独創的であり、ここに学会への実証的・理論的な貢献もあると思われる。それゆえ、すでに触れてきたが、本論文の基になった申請者の諸論考は国内外で非常に高く評価され、すでに学会発表の段階で学会賞を3回受賞し、また投稿論文も査読付き学術雑誌に複数回採択されるなど、関連学会等への貢献度が高い点も付け加えておく。

とはいえ、本論文にはいくつかの課題もある。誤字等の問題点は別にして、論文に内在する課題と今後に向けた残された課題は、以下の通りである。

(1)本論文はインタビューに基づく質的調査が中心であるが、今後は数量的な実証調査も求められるであろう。

(2)同時に、インタビューで得たデータが——プライバシーの問題もあって——すべてが

示されているわけではないが、本論文内で使用されているデータ記述(「語り」部分を含む)は当事者の発言の文脈の中でどのような位置にあるかがさらに明示される必要がある。

(3)さらに本論文では、送り出された韓国養子の意識と行動が議論の中心であったが、そうした韓国養子が送り出された韓国社会それ自体に関する歴史的・社会的要因の記述・分析のさらなる展開も今後求められるであろう。

(4)その点は同時に、韓国養子の主観的世界は本論文で適切に記述・分析されているとしても、さらにそのような主観的世界がいかにして形成されてきたのかという客観的ないしは間主観的な事態へのさらなる論及も必要となるであろう。

(5)最後に、本論文での主要な議論は韓国養子に限定されているために、例えば中国養子の場合にも同様なことが言えるのかどうか、つまり本論文での知見が「韓国」の国際養子に独自のものなのか、「国際養子」一般に妥当する知見なのかといった点が——この点の比較研究は本論文の主題ではなかったが——今後さらに解明される必要があるだろう。

以上のような課題は、一言でいうと、本論文で得られた知見が限定された課題設定の中での知見であって、その知見の一般化の可否を含めて多くの点で今後の検討課題でもあるということである。だがこのことは、申請者も十分に認識しているところであり、かつこのことによって本論文の特色や独創性等の長所が損なわれるものではなく、今後の研究の進展こそが大いに望まれる点であると思料できる。

以上のことから、審査委員は一致して、本論文について合格とするにふさわしいとの見解に至った。